

病院における患者の心理と建築計画に関する研究

人工透析室に対する腎不全患者の意向について

○正会員 江渕 淳一*2 同 友清 貴和*1
同 白水 敏矢*2

【研究の目的】

前報¹⁾では、人工透析がどのように行なわれているかをとらえ、透析室に対する看護側の意見・提案を分析し、人工透析室の計画のための手がかりを検討してきた。

今回は、前報で抽出された意見・提案を4つの重点項目(室内のアメニティ・室内のプライバシー・設備・付属諸室)としてとらえ、実際に透析治療を受ける患者の透析室に対する意識・要望を明らかにし、比較・検討を行ない、これからの透析室のあり方を提案することを目的とする。

【研究の方法】

まず透析患者の属性を明らかにし、患者自身が透析室内の様々な要素(光・音・色等)を心理的にどのように感じているのか、あるいは透析室の付属空間などの構成・使われ方はどうであるかなどをとらえるために、実際に透析治療を受けている患者に対してアンケート調査を行なった。

【調査の概要】

調査は、「鹿児島県腎臓を守る会」に登録し、各々の病院で治療を受けている患者に対して行なった。

調査項目は、患者の属性・光(明るさ)・色・音・視線・設備・付属空間等である。

表-1 調査の概要

| 配布数 | 回収施設数 | 回収数 | 回収率 |
|------|-------|------|-------|
| 420票 | 30カ所 | 235票 | 69.1% |

【調査結果】

①回答者の属性

性別にみると、男性56.6%、女性43.3%であった(図-1)。

入通院についてみると、全体の83.3%通院治療を受けている。また入院治療を受けている者は実質病院数(30)からみると1病院に1人の割合とかなり低い数

値である(図-2)。

通院時間では、全体の51.5%が30分以内の通院である。しかし、60分以上の割合も11.5%と以外に高い(図-3)。通院手段については、自家用車による通院が60.4%とかなり高い割合を示している(図-4)。性別で職業の有無をみると、男性の「有職」の比率は43.2%と、女性の14.7%に比べるとかなり高い(図-5)。

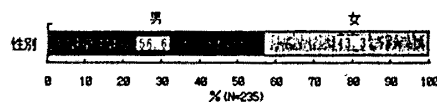


図-1 性別

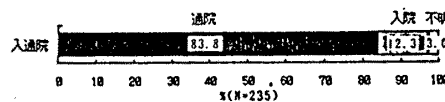


図-2 通院

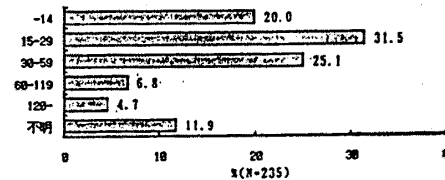


図-3 通院時間

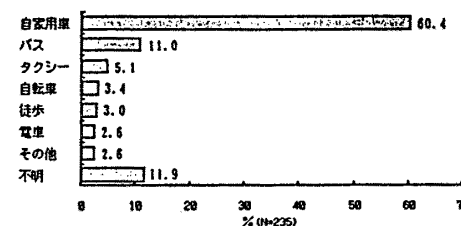


図-4 通院手段

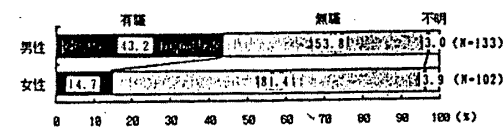


図-5 性別*職業の有無

*1 鹿児島大学助教授 工博 *2 同大学院生

透析治療の時間帯は総体的に午前中に受けている割合が高い傾向がある。ただし、これを職業の有無でみると、「有職」で午前中に治療を受けている割合は18.5%と低く、午後には治療を受けている割合は78.7%とかなり高い(図-6)。

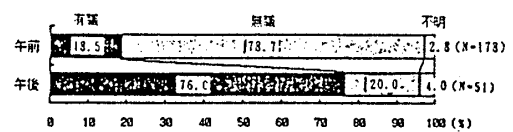


図-6 透析治療時間帯*職業の有無

透析治療に要する時間は、4時間以上5時間未満が56.2%、5時間以上6時間未満が40.4%であり、4時間以上6時間未満で全体の96.2%を占める(図-7)。

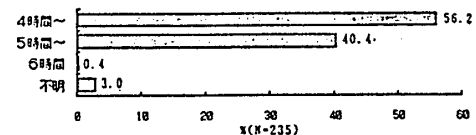


図-7 透析治療時間

透析治療期間では、10年以上が28.5%と高い割合を示し、5年以上では全体の60.4%にもものぼる(図-8)。

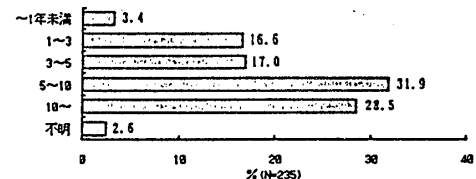


図-8 透析治療期間

透析治療の回数は週に3回が全体の95.3%を占め、ほとんどの患者は週に15時間程度の治療による時間的制約を受けていることになる(図-9)。

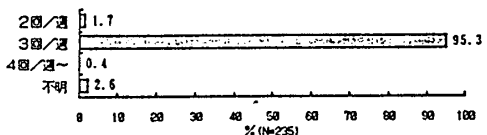


図-9 透析治療回数

②室内のアメニティ

・光(明るさ)について

透析室内の照明については、治療中に本を読む時、82.6%が「ちょうどよい」と回答し、治療中眠る時には72.3%が「ちょうどよい」と回答した(図-10)。

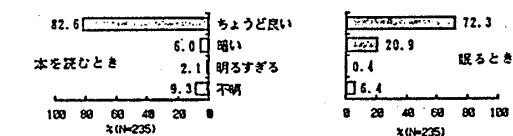


図-10 本を読むときの明るさ 眠るときの明るさ

室内の照明についてその明るさが可変式であるかについては、過半数以上の55.7%が「可変式でない」と回答し(図-11)、読書用スタンドについては、94.9%が「ない」と答えた(図-12)。

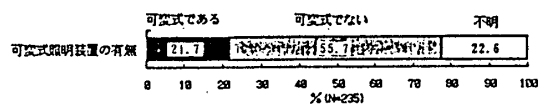


図-11 可変式照明装置の有無

・音について

音について調査した8つの項目の中で、「他の患者の声」、「職員の声・器具の音」、「枕元の機械の音」は「気になる」が20%以上の値を示した(図-13)。

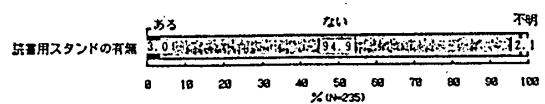


図-12 読書用スタンドの有無

この3つの項目を年齢別でみてみると、「他の患者の声」では顕著な差はみられなかったが(図-14)、「枕元の透析機械の音」、「職員の声・器具の音」でははっきりと年齢が若いほど、「気になる」傾向が現れた(図-15,16)。

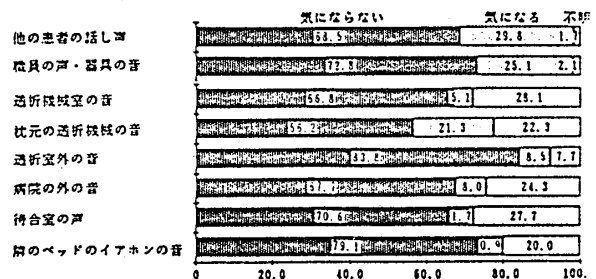


図-13

透析室内の音楽(BGM)は、66.4%の施設で流れていなかった(図-17)。

・内装について

「天井の色・模様」、「壁の色・模様」は、無地が多く、「気にならない」がはっきりと高い割合を示した(図-18)。

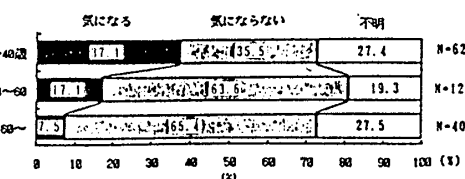


図-14 年齢*枕元の透析機械の音

室内における「花や絵の必要性」の間には、年齢が高くなるにつれ「必要」と答える率も高くなる(図-19)。

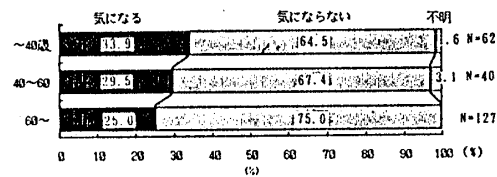


図-15 年齢*他の患者の話し声

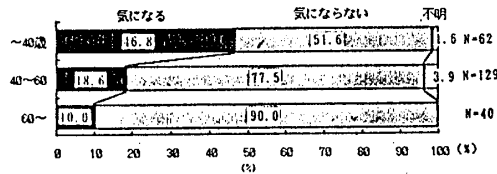


図-16 年齢*職員の声・器具の音

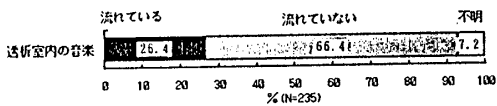


図-17 透析室内の音楽

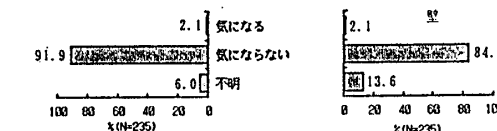


図-18 天井の色・模様 壁の色・模様

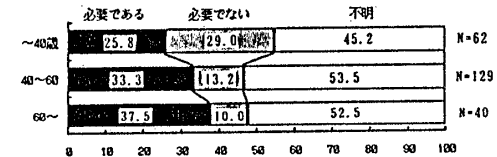


図-19 花や絵の必要性

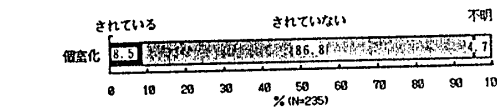


図-20 間仕切りによる個室化について

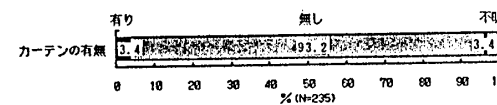


図-21 カーテンの有無

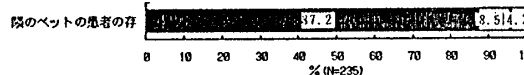


図-22 隣のベッドの患者の存在

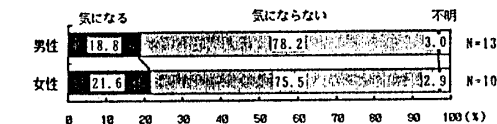


図-23 性別*隣の患者の視線・動き

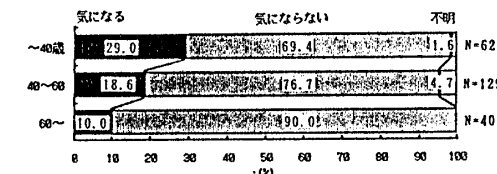


図-24 年齢*隣の患者の視線・動き

③室内のプライバシー

間仕切りによる個室化は、ほとんどなされていない (図-20)。カーテンも設置されているところは非常に少ない (図-21)。隣の患者の存在については、87.2%が「居てもよい」と解答している (図-22)。隣の患者の視線・動きは、「気にならない」が多いが、性別でみると女性の方が若干「気になる」率が高い (図-23)。また年齢別でみると、年齢が高くなるにつれ「気になる」率は低くなる (図-24)。

④設備

ベッドの選択は「自由でない」が8割を越えており (図-25)、病院側の都合で位置を指定される場合が多い。好きなベッドの位置については「窓際」26.8%、「NSの近く」22.6%の順で多かった (図-26)。ベッドの昇降は、「不便である」と感じる患者はほとんどいない (図-27)。病院へ行く時、「持ち物の有無」については、「有る」が7割近かった (図-28)。「持ち物を置く場所」は、ロッカーが多いがベットまわりもあり、治療の妨げが懸念される (図-29)。

⑤付属諸室

待合室の利用については「利用する」「利用しない」がほぼ同数であるが (図-30)、性別でみると女性の方が利用率が高い (図-31)。利用時間については「治療前・後」とも15分未満が多い。次いで30分以上45分未満が多い。そして以外に多いのが「治療後」の60分以上である (図-32)。

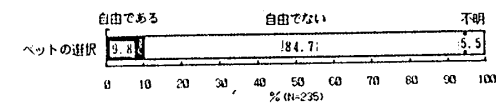


図-25 ベッドの選択

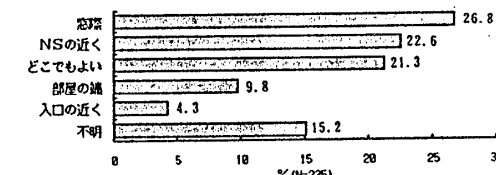


図-26 好きなベッドの位置

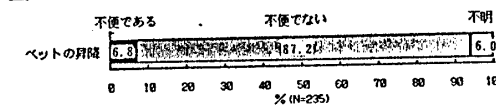


図-27 ベッドの昇降について

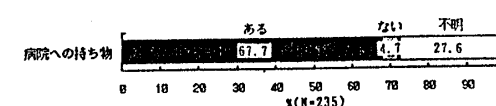


図-28 病院への持ち物

待合室を利用する人にとっては、「リラックスできる」と回答する傾向がはっきりと現れている(図-33)

「透析室に設置されているトイレ」については「有る」方が多いが(図-34)、その形態については「男女別でない」方が多い(図-35)。

【まとめ】

・アメニティについて

前報で示したように透析室のスタッフの意見では、透析室における調光・遮光設備、BGMの活用、花・絵画等の設置などの必要性が強くだされていた。

本を読む等の起きているときの行為と眠るという行為では当然必要とされる照明度も違って来る。しかし現状では、可変式照明器具も読書用スタンドも設置は十分とは言えない。また、室内の音楽(BGM)はあまり利用されておらず、花・絵等もそれほど必要とは感じられていないという結果がでた。しかし、病院で治療を受けている時間の長さ等を考慮するとこれらの設備などは、患者がより快適に治療を受けるために導入する方向で検討するべきであろう。

・プライバシーについて

プライバシーにおいてもキュービクルカーテンの設置や個室の採用等がスタッフの要望として出されていた。しかし、他人の存在や視線、動きは全体としてはそれほど気にされておらず、カーテン、間仕切りの設置もあまり行なわれていないが、人間の感覚的な個人差等を考えると、間仕切りやカーテンの設置等のフレキシブルな対応が必要といえる。また、個室化については、患者側の意識からはあまり必要とされておらず、看護面での問題もあり、現段階では合併症を持つ重症患者や身体的機能の衰えのみられる高齢者に対して、特別設備を備えたICUとして検討されるべきであろう。

・付属諸室について

通院患者の方が極端に多い現状では、ロッカー設備のある更衣室は必要不可欠なものといえる。待合室については分離型の方向で考え、透析室を中心に、カンファレンスルーム、患者用男女別トイレを設置する等、患者・看護スタッフの両者に配慮される計画が必要である。

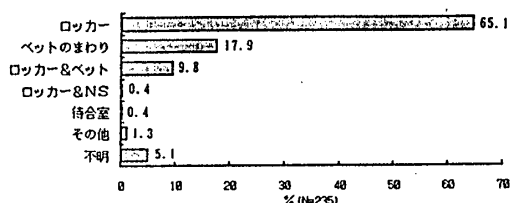


図-29 持ち物を置く場所

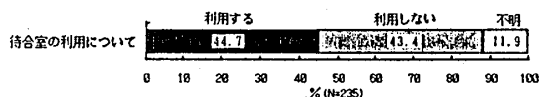


図-30 待合室の利用について

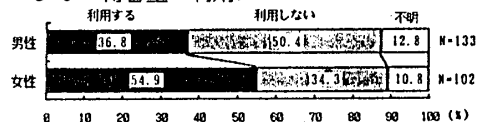


図-31 性別*待合室・休憩室の利用

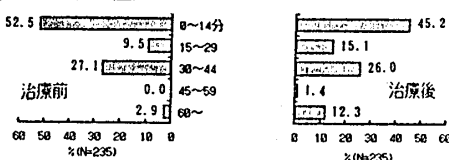


図-32 待合室利用時間

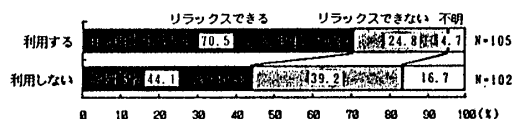


図-33 待合室の利用の有無

*待合室はリラックスできる空間か

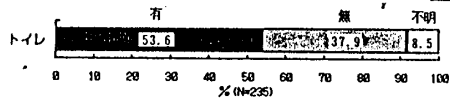


図-34 トイレの有無

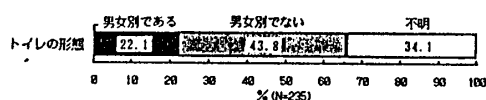


図-35 トイレの形態

【おわりに】

本研究を行うにあたり、調査に御協力頂いた鹿児島県腎臓を守る会のスタッフの方々に深く感謝の意を表します。また、本稿の資料は鹿児島大学工学部 白水敏矢君の卒業研究としてまとめられたものであり、記して謝意を表したい。

*1) 永田、米盛：人工透析室の使われ方と計画指針に関する研究
日本建築学会九州支部研究報告集(1989.3)

参考文献

- 1) 柴垣 昌功ほか：透析患者の看護；医学書院 S59.9
- 2) 長沢 奏、上野 淳、山下 哲郎ほか：ベッドまわりの看護作業領域の分布—病棟の建築計画に関する研究—；日本建築学会大会学術講演梗概集 S61.8